

文脈を伴うフォーカス・オン・フォームの指導効果

Effects of focus-on-form with contexts

渡邊 万里子

Mariko Watanabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード : フォーカス・オン・フォーム, 不定詞, 気づき

Key words : Focus-on-form, Infinitives, Noticing

1. 研究の背景と目的

本研究におけるフォーカス・オン・フォーム (以下 FonF) とは, 学習者が意味伝達活動の中で単一の目標文法項目の使用を何度も経験し習得できるように計画された指導と定義される *planned focus-on-form* (Ellis, 2002) を指す。FonF は意味中心の言語活動を行いながらも学習者の注意を特定の言語形式に向けさせる指導であり, 文脈を伴わない文法重視の指導, あるいは, 形式は比較的問題にされないコミュニケーション重視の指導と比較されてその利点を論じられる。その利点は, (a) 意味重視の活動を柱とする中で, 学習者は形式にも注意を払うことができる, (b) コミュニケーション上のつまづきによって, 学習者は形式に対する気づきを得る, (c) 英語でメッセージを伝えるのに適した言語表現を探る過程で, 学習者は形式 (form) ・意味 (meaning) ・機能 (function) の3つを同時に習得することができる, と理解されている。日本人学習者に対する FonF の指導効果については, 村野井 (2005), Kimura (2014) によって効果があると結論づけられているが, 指導効果の検証は未だに模索の段階にあると言えよう。なぜならこれらの実証研究にはそもそも3点の疑問が存在するからである。

第1の疑問は, FonF の利点は形式か意味のどちらか一方に偏った指導法と比較して主張されているにも関わらず, その効果の立証過程で比較がなされていないものがあることである。特に, 形式に焦点を当てた指導効果との比較は, それが英語教育の中心となってきた日本において FonF の指導効果を明らかにするのに不可欠であると考えられるが, 村野井 (2005) では比較対象となる従来の指導を受けるグループは設けられていない。

第2の疑問点は, 実験で行われた FonF は本当に学習者のコミュニケーション上のつまづきをきっかけとする形式に対する気づき *noticing a form* を生み出したかどうかである。習得につながる *noticing a form* とは, 自分のメッセージを表現する形式がわからないとの気づき *noticing a hole* と, 目標文法項目と自分の中間言語との違いへの気づき *noticing the gap* を経て引き起こされるものであると考えられる (Swain, 2000; Izumi, 2002)。しかし, 村野井 (2005) と Kimura (2014) で行われた言語活動はこの気づきのプロセスを学習者に経験させるものではなく, 形式・意味・機能の理解を伴う習得につながる気づきが学習者に起きたとは言えない。このような気づきが起こるには, 学習者は一連の文法指導の過程において一度も用いられていない初出の文脈の中で言語活動を行う必要がある。

第3の疑問点は FonF の効果測定方法にある。FonF は実際の言語使用に近い自然な文脈の中で目標文法項目を導入することで, 形式・意味・機能の同時習得を狙う指導法である。したがってこうした特徴をもつ FonF の効果を測るテストは, 実際の言語使用に近い言語活動の中で学習者が目標文法項目を適切に使用できるかどうかを評価するものでなくてはならない。しかしながら, 我が国の先行研究でこれまで用いられたテストはそのような言語活動を保証していない。

これらの先行研究の問題点を踏まえて, 本研究では実験を行い FonF の指導効果を検証する。具体的な改善策は, (a) 形式重視指導の効果との比較を行う, (b) 指導の段階で初出の文脈を与えることにより, 形式・意味・機能の理解を伴う習得につながる気づきのプロセス *noticing a hole* – *noticing the*

gap – noticing a form が起こるように設計する, (c) テストでは, 文脈を伴った英文を提示した上で学習者のアウトプットを求める, である. リサーチ・クエスションは 次の 2 点である.

- (1) FonF の指導を受ける学習者と形式重視の指導を受ける学習者の直後テストの結果に差はあるか.
- (2) FonF の指導を受ける学習者と形式重視の指導を受ける学習者の遅延テストの結果に差はあるか.

2. 研究実施内容

中学の 1 年生の学習者 60 名を対象に実験を行った. 参加者を FonF による文法導入を受ける実験群 (30 名) と, 文脈を伴わずに形式と意味の導入を受ける統制群 (30 名) に分け, それぞれに文法指導をした. 目標文法項目は参加者にとって未習である不定詞名詞用法である.

実験群では, 教師とクラスの間で意味を重視したやりとりを通して不定詞の導入を行った. そのやりとりは学習者に noticing a hole – noticing the gap – noticing a form が起こるようにデザインされたものである (表 1). 導入後, 明示的な文法説明と練習を行った. 練習と活動も, 不定詞を使う必然性のある自然な文脈において学習者が不定詞を使用するように設定した. また同一の英文を繰り返しアウトプットさせることはせず, 常に初出の文脈の中でそれに適したメッセージを産出させるようにして, 学習者の言語活動が単に英文を暗記する作業に陥らないように配慮した.

表 1. 実験群の文法導入

教師 : Did you watch the soccer game on Tuesday night? It was exciting! I am glad that Japan will play in the Olympic games this year.
(クラスに向かって) Who watched the game on TV?
クラス : (該当者挙手)
教師 : Do you play soccer? (サッカー部ではない生徒 A に返答を求める)
生徒 A : No.
教師 : Then why did you watch the game?
生徒 A : ①I like... watch soccer. 【noticing a hole】
教師 : Oh, ②you like to watch soccer games on TV, but you don't like to play soccer. 【noticing the gap】 【noticing a form】

生徒 A : Yes.

教師 : Who doesn't like to play soccer, but likes to watch games on TV?

クラス : (該当者挙手)

教師 : I like to play soccer, and I like to watch soccer games on TV, too.

統制群に対しては形式重視の指導を行った. まず明示的な文法説明によって不定詞を導入した. 説明とその後の練習において学習者がインプットあるいはアウトプットする全ての英文は文脈を伴わない. 練習には実験群の練習や活動で用いたものと同じ英文を用い, 指導法以外の両群の違いを最小限にとどめるよう心がけた.

指導効果は, 会話文を完成させる問題 6 問から構成されたテストによって測定した. テストは指導直後に直後テストとして, また指導の 7 週間後に遅延テストとして同じ内容で 2 度実施された. 問題例を以下に示す.

(1) ※B さん : 最近ラグビー観戦が趣味である.

A: What's your favorite sports?好きなスポーツは何?

B: Well, I like rugby. えーと, ラグビーが好きだよ.

A: What's your position?

どのポジションでプレーしてるの?

B: No. I (like to watch rugby games) on TV.

A: I see. Then do you often see games?

あ, そう. じゃあ, 試合をよく見るの?

B: Yes. It's a lot of fun. うん, すごい楽しいよ.

A: What is your favorite team?どこのチームが好きなの?

B: My favorite team is Yamaha, and my favorite player is Goromaru. He is cool.

ヤマハ. 五郎丸が好きなんだ. かつこいいよ.

実験の結果は表 2 のとおりである.

表 2. 直後・遅延テストの結果

	直後				
	M	SD	t	d	
実験群	20.33	8.26	1.01	0.26	
統制群	19.19	7.88			
	遅延				
	M	SD	t	d	
実験群	8.65	7.93	2.31*	0.60	*p < .05
統制群	3.87	4.00			

リサーチ・クエスチョン(1) に関して、実験の結果、直後テストにおいては実験群と統制群の平均点に有意差は確認されなかった。テストは文脈を伴っていたにもかかわらず、実験群と形式・意味・機能の結びつきを理解していない統制群の得点の間にあまり差がなかったのは、指導直後であったので to+動詞の原形の形式が強く印象に残っていたためだと推測される。

リサーチ・クエスチョン(2) に関しては、遅延テストにおいて実験群の平均点が統制群の平均点を有意に上回り、効果量は中程度であった。この結果は、文脈を伴わない形式重視の指導よりも FonF による指導の方が、指導効果はより持続することを示している。この結果が生じた要因として、次の 2 点が考えられる。

第 1 に、実験群では学習者は導入段階での教師とのやりとりにおいて、noticing a hole – noticing the gap を経て、不定詞の形式への気づき noticing a form が生まれた。一方、統制群の学習者はこうした気づきのプロセスを経していない。実験群の学習者は気づきによってより高い効果を得たと考えられる。

第 2 に、実験群の学習者には練習段階で初出の文脈が与えられ、その中で表現すべき内容(意味)とそれを表現する適切な形式を選択してアウトプットすることが求められた。それにより、形式・意味・機能の結びつきに対する理解が進んだと考えられる。一方、統制群の学習者の練習は文脈を伴わない和文英訳であった。そのため、形式と意味は結びついていても、その機能への理解は起こりにくい。形式・意味・機能の結びつきに対する理解の有無が、指導効果の差を生み出した一つの要因だと考えられる。

3. まとめと今後の課題

本研究は、FonF の指導効果の先行研究に見られる 3 つの問題点を改善し、不定詞名詞用法の導入を形式重視の指導と FonF による指導で行い、指導効果の比較を行った。その結果、形式重視の指導よりも FonF の方が効果は持続することが明らかになった。

また、先行研究と本実験結果から FonF の指導上の留意事項として次の 2 点が得られた。

(1) 学習者の形式に対する気づき noticing a form は、noticing a hole と noticing the gap を経て生じる。そのためには、学習者はアウトプットを試みた後に目標言語項目のインプットを受けることが不可欠である。

(2) 学習者は、一連の文法指導の過程において一度も用いられていない初出の文脈の中で言語活動を行わなくてはならない。初出の文脈の中で適切なアウトプットを行うことにより、形式・意味・機能の結びつきの理解は定着する。

形式・意味・機能の結びつきが、学習者にとって意味のあるやりとりの中で気づきやすいものかどうかは言語項目によって異なる。同様の実験デザインで、中学校や高校で扱われる主要な文法項目の指導効果を検証し、それぞれの言語項目に適した効果的な FonF の指導法を探ることを今後の課題としたい。

主要参考文献

- Ellis, R. (2001). Introduction: Investigating form-focused instruction. *Language Learning*, 51(s1), 1-46.
- Izumi, S. (2002). Output, input enhancement, and the noticing hypothesis: An experimental study on ESL relativization. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 551-557.
- Kimura, N. (2014). 「Differential effects on focus on form and focus on formS on the acquisition of English relative clauses by EFL learners in Japan」『学校教育学研究論集』第 29 号, 29-39.
- Swain, M. (2000). The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In P. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning*. 97-114. Oxford: Oxford University Press.

村野井仁 (2005). 「フォーカス・オン・フォームが英語運用能力伸長に与える効果についての実証的研究」『平成 15・16 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 課題番号 15520367 研究成果報告書』

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] 渡邊万里子 「フォーカス・オン・フォームによる不定詞導入の効果—初出の文脈での言語活動を重視して—」 関東甲信越英語教育学会紀要 KATE Journal 査読有 第 31 号 2017 年 (印刷中)